

総括として

2010年4月19日

それぞれの神学的潮流を代表しつつ、聖書信仰に立つ福音主義を守ってきた四つの神学校の校長・学長または前校長など代表による、それぞれの聖書観の発表を興味深く聞いた。

神戸改革派神学校の市川先生は弁証学、神戸ルーテル神学校の橋本先生は組織神学とくに今回の発表では歴史神学、大阪キリスト教短大の津村先生は釈義神学、福音聖書神学校の真鍋先生は宣教師としてのご体験を背景にした実践神学と、それぞれのご専門の分野の背景を感じさせる発表としても多様な面からの見解を聞いて、有意義であった。

中心的问题是「文字」と言うことになるかと感じた。問題は、聖書の權威の土台を示す聖書靈感論において、正典としての各書が書かれたとき聖霊がその一文字一文字に至って靈感されたという文字靈感の事実を、正面からどう取り扱うかであると思う。その意識の希薄化は問題となる。主ご自身が聖書の「文字」に込められた權威の認識に立ち、聖霊による旧約以来の文書化の意義を正しく評価して、慎重な釈義の積み重ねの上で、正典論の深化が必要である。その上で有機的逐語十全靈感の事実を踏まえた釈義神学の構築が、福音主義として急務である。それは、単なる批評的理性に立って聖書を外的情報で判断し釈義しようとする（それは実際は聖書の超自然的事実と違うので不可能だが）、いわゆる近年の聖書神学とは基本的に違った、超自然的啓示の事実を聖書文書の詳細な実態を把握することで論証すると言うような（例えばG. Vosのような）学問となると思う。

今回の発表では、素朴な聖書信仰も見られたが、聖書靈感論が単なる伝統のように語られる場合があり、その現実意識が薄い印象を残す部分もあった。

ルーテル教会が「靈感論において形式よりキリストの福音の内容を中心とする」という発言は、キリストの福音が正典形成の中心であると言う歴史的背景から理解できるが、とはいえ、「福音の中心的内容が、それぞれの文字にまで及ぶ靈感となっている」と言うのが、十全靈感(plenary inspiration)の真理であるので、その点の確認は、釈義の実際では特に大切であると思う。キリストの救いは靈感の核心だが(H. Ridderbos, Authority of the NT Scripture)それが文字にいたるまで及んでいると言うのが聖書靈感論であり、神とキリストの權威

によって内容のみか文字に至るまで聖霊が靈感された課程として、キリストご自身の聖書の文字への認識をはじめ、聖書の文書化の意義の研究が重要となる。

「聖書は救いについては無謬」「聖書の内容が靈感」「イエスキリストの福音を正しく記す点での聖霊の働きが、靈感の定義」など、旧来のウォーフィールド・ベルコフ・ポエットナーなど福音派で標準的とされてきた改革主義的聖書論の「有機的逐語十全靈感」の考えとは違う面が見られ、また、「いままで機械的靈感説が多かった」と、過去の高倉・熊野・渡辺善太などの逐語靈感論批判を連想させる点もあった。

人間的要素を十分に認め（有機的）、キリストの啓示の中心性に立ちつつ文書表現の詳細に至る（十全な）、聖霊の一言一言への（逐語の）靈感によって、私たちへの神の真理と福音の伝達が数千年にわたり守られてきたことを、日本の福音主義陣営として、学的に更に確認する営みを深める必要が、強く心に迫った会合であった。

なお、聖書信仰に立って、文語改訳・RV・ASVの目指したように原典の逐語的文章表現が透けて見えるような訳を目標とする「新改訳聖書」が、2016年を目指して新しい大改訂の作業に入った。新しく新日本聖書刊行会が統一母体として福音主義の諸教派諸神学校の協力の下、形成された。聖書の一言一言と、意味の流れが、より正確に日本語となるように、祈りをともにしていただければ幸いである。特に、近年の聖書言語の統語論（Syntax）的研究の深化を日本語訳にいかにより活用できるかが、一つの大きな鍵であると思う。

瀧浦 滋

改革長老教会・岡本契約教会牧師

神戸神学館代表